

◆ 文献抄録

Lichtenstein versus total extraperitoneal patch plasty versus transabdominal patch plasty technique for primary unilateral inguinal hernia repair :

A registry-based, propensity score-matched comparison of 57,906 patients

Köckerling F, Bittner R, Kofler M, et al

Ann Surg 269 : 351-357, 2019

目的：片側鼠経ヘルニアに対する Lichtenstein 法, TEP, TAPP の各治療法の結果の比較検討。

背景：ランダム化比較試験のメタ解析による研究結果がガイドラインに採用されているが、これらは症例数が少ないため、より多くの症例での比較検討は喫緊の課題である。

方法：2009 年 9 月 1 日から 2015 年 2 月 1 日までに、Herniamed Registry（事務局：ドイツ）に登録された片側鼠経ヘルニア症例のうち、1 年間 follow された計 57,906 症例を対象とした。Propensity score matching を用いて Lichtenstein 法 vs TEP を各群 12,564 例、Lichtenstein 法 vs TAPP を各群 16,375 例、TEP vs TAPP を各群 14,426 例同士で比較した。

結果：Lichtenstein 法は TEP に比べて術中合併症は少なかった（0.9% vs 1.2%, $p = 0.035$ ）が、術後合併症が多く（3.4% vs 1.7%, $p < 0.001$ ）、再手術が多く（1.1% vs 0.8%, $p = 0.008$ ）、安静時・労作時の疼痛が強かった（5.2% vs 4.3%, $p = 0.003$ ）（10.6 % vs 7.7%, $p < 0.001$ ）。Lichtenstein 法は TAPP に比べて術後合併症が多く（3.8% vs 3.3%, $p = 0.029$ ）、再手術が多く（1.2% vs 0.9%, $p = 0.019$ ）、安静時・労作時の疼痛が強かった（5 % vs 4.5%, $p = 0.029$ ）（10.2 % vs 7.8%, $p < 0.001$ ）

結語：TEP と TAPP は、Lichtenstein 法よ

り利点の多い術式であった。

【コメント】 tension-free を利点とするメッシュ法には Lichtenstein, Plug, Bilayer, Kugel などの方法があり、欧米では Lichtenstein 法が、本邦では Plug 法が広く普及している。日本ヘルニア学会ガイドライン（2015 年）によると、各法の再発率や合併症率に有意差は示されておらず、いずれも推奨グレード B である。腹腔鏡下手術については、手技に十分習熟した外科医が実施する場合に限定してグレード B で推奨されており、術時間は長いものの術後疼痛、神経損傷、慢性疼痛は軽度で回復が早く、再発率は同等とされている。本学会による 2017 年の集計では、TEP が 2,604 例、TAPP が 11,936 例、Plug 法が 6,189 例、Lichtenstein 法が 2,061 例施行され、それぞれの再発率は 1.6%, 1.9%, 3.9%, 0.8% で Plug 法の再発率が高い結果であったが、正確な観察期間は明らかにされていない。また、多施設共同研究で、TEP, TAPP の再発率が 0.22%, 0.46% と良好な結果が報告されているが、参加施設が 500 例以上の経験を持つ施設に限定されていた。本論文は、経験や手技に差のある様々な施設・外科医によって症例が登録され、全症例が 1 年の観察期間を経ているという点で、注目すべき重要な論文であると考えられる。

星川真有美, 本田五郎（新東京病院消化器外科）